

精魂こめた 毛筆づくりの至芸 ここにあり。



過去から未来へ
伝統のかたち
人から人へ

● 雲平筆

近年、現代人の筆離れが顕著になっていますが、書は日本人の心をあらわす美しい伝統文化のひとつ。墨文字の美しさを支える毛筆の製法にはいろいろあり、高島市安曇川町で作られている「雲平筆」は書家にも根強い人気があります。

「雲平筆」の伝統の技を受け継ぐ十五世藤野雲平さんの「攀桂堂」を訪ねました。

弘

法にも筆の誤り「弘法筆を扱ばず」扱ばずなど、弘法大師(空海)には筆にまつわることわざが多い。「弘法筆を扱ばず」

は、中国の故事「能書は筆を扱ばず」に書の大家であった弘法大師を当てはめたもので、書の達人は筆の良し悪しを問わないという意味だが、実際は、弘法大師が良い書を書くために、筆を使い分けていたといわれている。

書家はとりわけ筆へのこだわりが強く、なかでも高島市安曇川町の特産品である「雲平筆」はファンが多い。また、中国唐代に起源をもつ巻筆の製法を日本で唯一伝承しているという点で、その名は知る人ぞ知る存在

弘法も筆を扱ぶ!! 伝統ある巻筆の技法を 今に伝える「雲平筆」。

在。巻筆は、芯となる毛に上質の和紙を巻き固め、そのまわりに毛を植えて麻で締めるという独特の製法だが、現在では紙を巻かない水筆と呼ばれる製法が一般的で、時代の移ろいとともに巻筆は次第に衰退していったという。

「巻筆があるということも、現代の書家はほとんど知らない。いまの書風にも合わないでしょうね。水筆に比べて製作には時間と手間がかかりますが、その毛質は弾力性に富み、腰が強い。わざわざ巻筆を求めてくださるお客さまもいます」と、「攀桂堂」当主の十五世藤野雲平さんは話す。

受け、特に有栖川宮家に愛用されたという。その技法は歴代の当主に受け継がれ、現在、十五世の藤野さんが「雲平筆」の伝統を守っている。

「中学生の頃、藤樹書院へ勉強に来ておられた方が、父(十四世雲平氏)の筆づくりを見てお話をされていたとき、「お前も後を継ぐのか。はじめて作った筆は私が買うよ」と言っていた。ただ、見様見真似ではじめて作った筆を買ってくださった。いまから思えば、その方との出会いがあったお陰でいま筆を作っているのかなと思います」と、藤野さんに若き日の貴重なエピソードを紹介していただいた。

「攀桂堂」筆師十五世 藤野 雲平さん

18歳のときから先代について修業し、2001年に十五世雲平を襲名。今年で58歳を迎え、筆づくりをはじめてちょうど40年になる。「筆は美術品ではなく工芸品ですから、実際に使っていただき、書きやすかった、買ってよかったの一言をいただくだけでうれしい。お客さまに気に入っていただける筆を作らせてもらうのが理想です」



「攀桂堂」は藤樹神社の隣にあり、店内には太さや毛並みの異なるさまざまな筆が整然と並んでいる。



有栖川宮家と雲平筆

明治20年、有栖川宮熾仁(ありすがのみやたるひと)親王は、当時の当主・十二世雲平を呼び、長さ二尺九寸、差し渡し三寸八分の筆の図を自ら書き示し、斬新な筆の製作を依頼したと当時の注文控(写真下)に残されている。その自筆の図を掛け軸に仕立てて居間に飾られていた(写真右)。図には納品の際に親王が書き添えた直筆の御歌「遠祖の流れを今に書き伝う筆はふじのかぎりけるかな」が読み取れる。有栖川宮家と雲平筆の縁を物語る貴重な資料である。

昭和41年滋賀県指定無形文化財の認定を受けた十四世雲平氏が作製した古代銘筆の展示パネル。巻筆の種類が紹介されている。



古式ゆかしき巻筆のいろいろ

日本に古くからある製法で、芯毛を薄葉紙など上質の和紙で巻き固め、そのまわりに上毛をかけて(毛を植えて)穂をつけた筆のこと。種類としては「天平筆」「筆龍藤巻筆」「弘法大師流筆」「藤原定家卿筆」「上代様筆」「光悦筆」「道風朝臣用筆」などがある。

筆龍藤巻筆

軸に藤が巻かれている筆で、江戸時代の書道家のために工夫されたといわれている。筆の腰に装飾の金網を付け、籐を巻いて手のすべりを留めているという。写真は毛質の異なる大中小の5種類。

上代様筆

上代様とは平安時代中期の和様の書風で、小野道風と藤原佐理(すけまさ)の書風の長所をうまく生かして藤原行成が完成させたもの。右は短冊用、左は懐紙(かいし)用の筆。

天平筆

天平時代に写経のために使われた筆。昭和54年、十四世雲平氏は宮内庁の依頼で天平勝宝4年の大仏開眼供養に用いた「天平筆」の模造品を奈良正倉院に納めている。

小野道風朝臣用筆

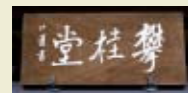
能書家・小野道風は、中国的な書風を脱皮して、日本の風土にふさわしい優雅典麗な新しい和様の書風を完成させたという。その書風にふさわしい筆とされている。

もうひとつの伝統の技・水筆

江戸末期に中国から伝わった紙を巻かない製法。穂全体を刷毛型に捌いた筆のことを捌筆(さばきふで)と呼び、穂の部分をフノリで固めて円錐形に整形された筆を固筆(かためふで)と呼ぶ。量産できるこの製法が現代の筆の主流である。



DATA



攀桂堂(はんけいどう)

高島市安曇川町上小川90-6 ☎0740-32-0236
●営業時間/8:30~18:00 日曜定休

「攀桂堂」の号は、正徳年間(五世雲平のとき)近衛豫楽院家照(いえひろ)公より賜ったもの。京都で代々毛筆製作を営み、明治の末に東京で店を構えるが、関東大震災で罹災し、十三世雲平氏の妻の実家である安曇川町上小川に移住。現在に至る。昭和41年に十四世雲平氏が滋賀県指定無形文化財の認定を受け、昭和天皇・皇后両陛下と当時の皇太子・同妃両殿下、平成になってから現在の皇太子・同妃両殿下に技術の台覧を賜る。店内には十五世雲平氏作のさまざまな種類の筆が並び、筆選びの相談にも乗ってもらえる。地元でつくられた雲平筆の書き味をまずは体験してみたいだろうか。



毛

筆は、用途に応じて動物の毛を材料に作られる。白くて柔らかい羊毛(ヤギの毛)や太くて硬い馬の毛、狸の毛は細くて強さがあり、鹿の毛は水の含みがよく持ちがいいといわれている。

「筆は基本的に硬めの毛を使った芯毛と柔らかい毛の上毛(化粧毛)で構成されていて、毛の性質を見極めながら、さまざまな毛を混ぜ合わせて作られます」と藤野さん。

その製作工程の一部をお仕事場で拝見させていただきました。

まず、選別した毛の脂肪分を取るために油抜きをしておく。粉殻の灰の中に毛をまぶして火のしテイロンをかけ、熱くなった毛を鹿の皮に包んで揉みあげる。次に逆毛など二本一本丁寧に切り除いて芯毛を揃え、長さをあわせて切り揃える(巻筆の場合は、芯毛を和紙で巻きつけるという繊細な作業が続く)。この後、乾燥させた芯毛にさらに上毛(化粧毛)をかけて、乾燥させた穂先の底を電気ゴテで焼き、麻糸で強く締める。最後は軸に上げて仕上げる。地道な作業の連続で、根気がなければとても務まらない職人の技だ。



筆づくりに使用される道具一式。上段左から櫛、ハサミ、ノコギリ、寸規(すんぎ、毛の長さを揃える定規)、下段左からハンサン(小刀)、五寸釘、コマ(筆の太さを調整する枠)、揃板、その下が焼きゴテ。



筆の原材料となる動物の毛。白い羊毛(ヤギの毛)や馬、狸、鹿、鼬(いたち)など、用途に応じて良質の毛が選ばれる。

書き味ばつぐん！ 湖西の地ではぐくまれた 筆づくりの秘密に迫る。

せでした。時間と経験を重ねていかなないと、いい筆はできませんから。筆づくりを学ぶ際、自分も字を書けないと筆の良し悪しがわからないので、書の勉強もしましたし、そうすることでお客さまの要望もわかるようになってきました」と藤野さんは話す。「お客さまのニーズにお応えするのが理想ですが、最近はおもう一歩進んで、自分なりのスタイルの筆を作りたいと思うようになってきました。それを気に入っていただいた方に買ってもらうようにしていきたい」と。

すでに3年が経ち、3年にわたる筆づくりの修業を終え、安曇川に帰ってくるという。「親から受け継いだものを自分の子に伝えたい。それが自分の役目だと、最近になってそういう思いが強くなりました。基礎だけはきっちり守りながら、息子と一緒にやっていきたいと思っています」

長きにわたる代々培われた筆づくりの技は、湖西の地でいままた、新たな息吹が吹き込まれようとしている。



櫛やハンサン(筆づくり用の小刀)を使って逆毛、すれ毛などを取り除き、毛先を揃えて芯毛をつくる「芯立て」と呼ばれる作業。職人の熟練した技術が求められる。



乾燥させた芯毛のまわりに上毛(化粧毛)をかけてさらに乾燥させ、根元に焼きゴテを当てて、五寸釘を使って穂首を麻糸で締め固める「尾締め」という作業。